

優秀賞

高校生部門

新潟県新発田市

新潟県立新発田農業高等学校3年

長野 涼夏

担任の先生

両親は共働きで、祖母と二人で過ごすことが多かった。姉が一人いたが歳が離れていて、話もうまく合わなかった。小学校の家庭訪問も祖母が対応し、授業参観も両親が来てくれたことは一度もない。それでも、仕方のないことだと納得していた。

小学校六年生るとき、授業参観のテーマが「両親への感謝の手紙を書こう」だった。私は困った。当日に手紙を読んで渡す、というものでクラスの人が楽しそうに書く姿がうらやましかった。私には書いても読んで渡す相手がいない。そのときの担任の先生は白紙のままの手紙を提出した私に対して何も言わなかった。家族の誰にも参観日の日にちは教えていなかった。伝えるだけ無駄だとあきらめていた。そして当日、生徒が手紙を読み、親が泣き、教室は感動でつつまれていた。相変わらず、私の席の後ろには誰もいない。もうすぐ私の番、逃げてしまおうかと考えていたとき教室の扉が開いた。入ってきたのは私の祖母だった。何も伝えていないのになぜ、と視線で訴えた。祖母は笑って、

「担任の先生から連絡があったのよ。遅れてごめんね」

と言っていた。担任の先生も笑っていた。そこから、白紙の手紙を持って祖母への感謝の気持ちを伝えた。いつも側にいてくれたこと、わがままを笑って許してくれたこと、今日参観日に来てくれたこと。思わず涙があふれた。このときはじめて、本当は淋しかったことに気が付いた。

後から担任の先生に呼ばれ、言われた。

「我慢しないでいい。淋しかったんだらう。あなたを愛していない人なんていないのだから。

また笑ってがんばらう」

その言葉にどれだけ救われたのだろうか。家族からも愛されていないのだと、心のどこかで思っていた。次は絶対に、両親を授業参観に呼ぼうと決めた。